

北海道の高校生から見る福島の現在 - 立命館慶祥高校東北研修成果報告 -

発行日：令和7年4月4日

発行者：福島県北海道事務所

～はじめに～

令和6年9月29日～10月4日にかけて北海道江別市の立命館慶祥高校1年生29名が研修旅行として岩手・宮城・福島を訪問しました。

この研修旅行は、将来医学部等への進学を志している生徒の皆さんが、東日本大震災に関連する施設を訪問し、被災した地域で活動する医療人材の方々からお話を伺うことで、地域医療の重要性や医療人材のあり方を探ることを目的として実施されました。



令和7年1月18日、札幌市の地下歩行空間で行われた福島県の物産品・観光PRイベントの場で研修成果の発表を行い、訪れた多くの方々に生徒の皆さんの思いをお聴きいただきました。



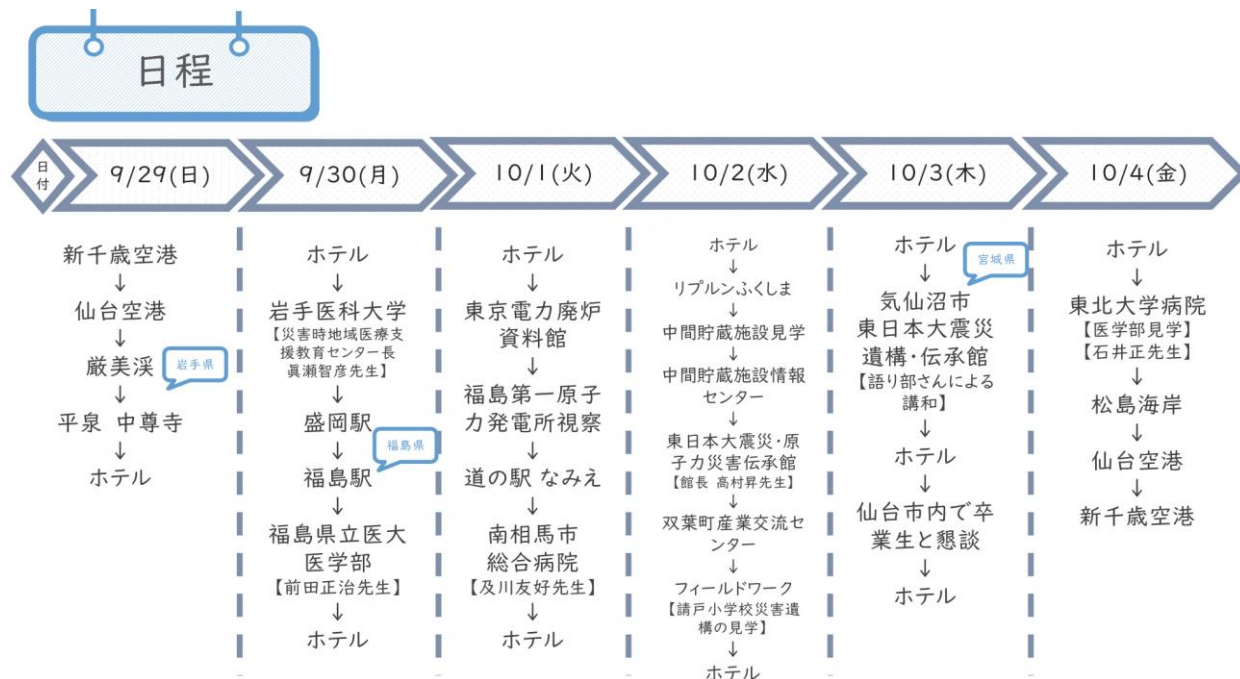
～発表生徒より～

立命館慶祥高校の希望者を対象に昨秋おこなった「東北メディカルツアー」の事後学習として、有志生徒が体験発表を行いました。発表させていただいたのは1月18日(土)大通と札幌駅を結ぶ地下歩行空間で開催された「福島県産品・観光PRイベント」です。参加者で分担して作成したスライドを用いて、福島第一原子力発電所や中間貯蔵施設に線量計をつけて立ち入らせていただいた時に伺ったお話、「東日本大震災・原子力災害伝承館」や津波の甚大な被害を受けた震災遺構である「浪江町立請戸小学校」を見学して受けた強い衝撃などを、自分達の言葉で聴衆の皆さんにお伝えしました。また、福島県は震災後長く風評被害が続き、災害に加えてさらに大きな苦勞があったことを知り、原発問題について正しい知識を得て冷静に判断することが大切である、というメッセージをお届けすることができました。

会場の皆さんは真剣な表情で時にはうなずきながら聞いてくださいました。発表後は福島の特産品が販売されましたが、人気のあんぼ柿はあっという間に売り切れていました。販売場所の横に置かせていただいた体験発表ポスターをご覧になって、「私は福島出身なのよ、発表ありがとう」とお声かけくださった方もいました。今回このような貴重な発表機会をくださった福島県北海道事務所の方々に感謝いたします。ありがとうございました。



<研修の行程>



<発表内容のまとめ>

はじめに福島第一原子力発電所についてです。視察にあたってまず、東京電力廃炉資料館というところで震災当時の福島原発の状況や対応などをまとめたビデオを視聴してから、視察に向かいました。視察では、廃炉作業中の1,2号機の様子を見せてもらいました。2号機では事故以降初めて燃料デブリの取り出しに成功し、これからも廃炉作業が進んでいく見通しです。

案内してくださった方から、ALPS処理水について説明していただきました。燃料デブリを冷やす水と雨や地下水が混ざること、放射性物質が含まれた汚染水と呼ばれるものになります。この汚染水から放射性物質の大部分を占めるセシウムとストロンチウムを取り除き、その後ALPSという機械でトリチウム以外の放射性物質を取り除いたものをALPS処理水といいます。この処理水を海水で薄め、トリチウム濃度が安全基準を大幅に下回るようにしてから放出しているということでした。

視察中は1人1台線量計を身に付けていましたが、視察後に確認した最終的な被ばく線量は0.02mSv(ミリシーベルト)程度で、これはX線検査1回の被ばく量(0.05mSv)よりも少ないです。また、作業員の方たちは3時間おきに3組をローテーションして作業し、作業後には線量のチェックを行うと伺いました。このように視察を通じて私たちは、多くの情報を得たうえで「正しく怖がる」ことが大切、ということ学びました。

次に中間貯蔵施設についてです。原発事故に伴い、放射能汚染された土壌や廃棄物が街中に散乱しています。その放射能汚染された土壌や廃棄物に、国や市町村は除染作業を行っています。その土壌や廃棄物を安全で集中的に保管するための施設が中間貯蔵施設です。私たちは実際にその場所にバスで連れて行っていただき、原子力発電所内と同じように線量計を持ち、ヘルメットを着けて立ち入らせてもらいました。中間貯蔵施設の土壌や廃棄物は、30年後に県外で最終処分されます。

途中、大熊町の老人ホームも車窓から見学しました。ここは、津波の影響こそ免れましたが、放射能汚染の影響で今も住民の方々は帰ってこられていません。中は物が散乱していたり、車のタイヤの空気が抜けたままであったり、まるで地震から時間が止まったままであるようでした。

次に東日本大震災・原子力災害伝承館についてです。ここは福島が受けた複合災害の実態や復興に向けた歩みを展示している施設で、実物資料や当時の映像、福島第一原発の模型などが展示されていました。特に実物資料からは何度も避難を繰り返すことを余儀なくされた方々の混乱がひしひしと伝わってきました。

続いて請戸小学校災害遺構についてです。こちらは浪江町に位置する小学校で、生徒全員が避難することができたため、2021年より震災遺構として一般公開されています。被害を受けたところがそのままになっていて、津波の脅威を感じました。また、体育館は卒業式の準備がなされていたり、時計が津波到達の時間で止まっていたりして、震災が起こってから時が動いていないような不思議な感覚がしたことが印象的です。見学後、請戸小学校付近へフィールドワークに訪れました。当時の請戸小の生徒が避難した丘や、双葉駅、消防署を見て、そこでも津波の恐ろしさを実感しました。

最後に、私たちは今回の研修を通して東日本大震災の被害の甚大さを学ぶことができました。特に福島への風評被害が心に強く残り、この発表をさせていただきました。震災発生から14年という時間が経ちますが、今回の経験を私たちが発信していくことで、震災で起こった出来事を風化させないようにしたいと思います。

<発表について>

私たちは令和7年1月18日(土)に札幌地下歩行空間、チカホでの福島県産品観光PRイベントで、10分間の貴重なお時間をいただき、私たちが経験・体験してきた事柄について生徒を代表して発表させていただきました。当日は満席で、程よい緊張感を保ち、それでいてスムーズに発表を進行させることができました。マイクの受け渡しやパワーポイントの進め方についても問題なく練習通りに行うことができました。発表前の備品準備のお手伝いなどもさせていただき、職員の方々とも一体となって、このような素敵なイベントに参加させていただくことができた実感しています。

発表にあたっては、実際に会場で発表した私たちだけでなく、多くの助力がありました。どの方が見ても見やすいスライドづくりを担当してくれたり、カラフルでわかりやすくパツと通行人の方の目を引くようなポスターを作成してくれたりなど、直接注目を浴びなくても陰ながら活躍してくれた研修の仲間たちや、私たちの発表をより良いものにするために時間を割き、協力してくださった先生方にも深く感謝しています。

これからは、研修を通して学んだことはもちろん、今回の発表のための練習や本番を通して学ぶことができた、伝える際に必要なスキルや聞いていただくためのスキルなどを学校生活で活用していきます。

<研修について>

私たちは令和6年9月29日から10月4日までの5泊6日、岩手、福島、宮城の東北三県で研修を行いました。本研修の目的は「人から学ぶ」ことであり、特に東日本大震災に関わった医療関係者の講話を聴き、災害遺構や福島原子力発電所の訪問を通じ、震災や復興に関する理解を深めました。福島第一原発に向かう途中では、大熊町などの帰還困難区域を通過しました。かつて人々が住んでいたその場所は、震災の影響でひとけがなくなったままでした。草が生い茂る畑や空っぽの家々は、震災前の様子が想像できないほどの変わりようで、その景色に私は胸を痛めました。住民の方々にとっては過去の思い出が詰まった場所であっても、現在の姿は寂しさを感じさせるものでした。

福島県立医科大学の前田正治先生の講話は、私達の災害医療に対する考え方を変えました。前田先生は「災害こころの医学講座」の主任教授で、震災による心の傷について多くの事例を紹介してくださいました。震災は他の災害とは異なり、今も多くの人にトラウマを残しています。たとえば、自衛隊が救助に来なかったことによるトラウマや、家族とともに避難するか医者としての役割を選び被災地に残るかの葛藤、原発の影響で地元に住み続けられない人々の思いなど。様々な理由から現在も悩みを抱える人々がいることを知り、災害医療は単に命を救うことに留まらず、アフターケアの重要性があると気づかされました。

私達が今感じている悩みや勉強への取り組みは、まずは家族や友達が元気であることが前提であるということも、旅を通じて確認できました。この貴重な体験を、今後の自分達の成長や進んでいく道に必ず活かしていきたいです。

～研修参加者の声～

私は、東日本大震災から 10 年余が経った東北地方を訪れ、当時の医療について学ぶ研修に参加しました。

私がこの研修で学んだことは、災害禍における医療の大切さです。「災害医療」という言葉がありますが、これは、言葉の通り災害が起きた際に行う医療行為のことです。ですが、それには通常時の医療行為とは異なる点があります。それは、より素早い判断と、より迅速な処置を行う必要があることです。私たちが訪ねた、実際に災害被害の中で医療行為を行っていた医師の方々の話によると、災害当時、医療関係者には平常心で正確に、かつ迅速に医療行為をすることが求められていました。災害という非日常に誰もが不安を感じていました。もちろん医療関係者もそう感じていましたが、医療行為を行う者として行うべきことは助けられる人を 1 人でも多く救うことだ、と思い直し「災害医療」を行っていました。

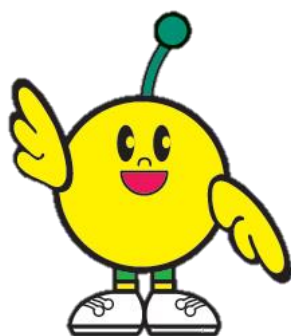
私は今回の研修で初めて、「災害医療」という言葉を学びました。災害という誰もが不安を感じ、慣れない状況の中でも、人々の不安を和らげ医療行為を行う医療関係者の姿に感銘を受けました。医療職を目指す高校生として、この研修の経験を心に留めていこうと思います。



～関連情報～

今回、生徒の皆さんが発表用に作成したスライド資料やパネルは以下の福島県北海道事務所のホームページに掲載しております。

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/01430a/04ritsumeikankeisyou.html>



福島県復興シンボルキャラクター
キビタン

【お問い合わせ】

発行者：福島県北海道事務所

所在地：札幌市中央区北 1 条西 2 丁目 2-1

北海道経済センター 5 階

電話：011-241-8717

FAX：011-241-8719

メール：hokkaido.jimusho@pref.fukushima.lg.jp

H P：https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/01430a/